

授業改善について

～学習者が主体的な学びを身に付けるために、
「主体的・対話的で深い学び」を生かした講義の工夫～

明星大学教育学部教育学科 特任教授 高野良彦

1 はじめに～私の教員としての矜持～

37年間の公立学校での教員経験を振り返って、今現在、一番強く思うことは、「教員の生命線は何と言っても授業である」と言うことに尽きる。

さらに付け加えるならば、生徒指導に課題を抱えていた学校経営の経験から、授業を通してこそ生活指導、生徒指導の効果を上げることができるということである。だからこそ何より授業を大切に考えたいと思っている。

縁あって教員志望の学生を対象に教壇に立っている現在、私自身がこのことをしっかり理解してもらうように講義を展開している。そして、望ましい授業を展開することを通して、学生に授業そのもののあり方を考え、学んで欲しいとも期待している。

小学生、中学生の子どもたちにとって教員は一番の身近にいる大人として、そのお手本となるべき存在であることと同様に、学生にとって教員である私は授業実践者の一人としてお手本となるような授業、すなわち講義をすべきだと考えているし、そう信じている。

なぜなら、すべての教員にとって自律した学習者を育てることこそが、その大きなねらいであるはずだからだ。

まさにテーマに掲げた「学習者が主体的な学びを身に付けるために『主体的・対話的で深い学び』を生かした講義」を私自身が実践することである。ここ数年間の私自身の拙い授業改善について「中等教育実習指導」でのおもな取り組みを中心に以下に述べてみたい。

2 講義のねらい

一時間の授業のねらいを明確にして授業を展開することは、授業を成功させるためには必要不可欠なことであることは言うまでもないことである。大学での1コマ90分の15回の講義（講座）においても同様である。

最初の講義の際にはいつもオリエンテーションとして講義の進め方、講義で目指すねらい、そしてルールなどを説明する。

私は、このことに加えてあえて最初の講義の際に「大学とはどんなところか」と「教育哲学を持つこと」というテーマの話をし、教員志望の学生たちの意識改革や意欲を喚起するように心がけている。言わば、学生に期待することを語るのである。

（1）大学とはどんなところか

小学校、中学校、高等学校と大学はどう違うか。そもそも大学とはどういうところかを改めて学生に問いたい。

そして私なりの考えを話す。本来、大学とは、教えてもらうところではないはず、と。

学習の方法や調べ方などについては、小学校、中学校そして高等学校で様々な学んできたはずである。ひいては、大学というところは、教えてもらう場所でもなく、教育を受ける場所でもないと考えている。本来の大学の教育とは、「講義で行われる授業にあるのではなく、学びたい学生が主体的に学ぶところに

あるはず。これが本来の大学のシステムだと私は信じている。」と話す。このような話をして、私は学生の主体的で積極的な講義への参加を期待している。

（２）教育哲学を持つこと

子どもが好きであることは、教員として大切な資質であると思うが、これだけでは今の厳しい教育環境の中で教員を続けることは難しいと思う。教員になろうとする者には、自身のはっきりとした教育哲学を持つことを勧めたい。自分で自身の気持ちを確固としたものにすれば少々のことであっても揺らぐことはない。

４年間の在学中に自身の教育哲学を持つように促したい。教育哲学は難しいことではない。要するに、自分はどんな教員になりたいのか、自分はどんなことを子どもに語る（教える）教員になりたいのか、自分はどんな学級を創りたいのかを明確にすることである。

私の講義も含めて大学で受ける様々な講義から自分なりの教育哲学を持つようにして欲しいと思う。また、これは教員にならずともあらゆる社会人としての生き方にも通じるものが根底にはあるとも話している。

（３）講義のねらい

学生が15回の講義を意欲的に、また主体的に受けるためにも講義のねらいをきちんと伝えることはどの講義にも必要である。私が担当する中等教育実習指導では次のことをねらいとしている。

教育実習を「より効果的に実り多いものにするために」をねらいとしてこの講義を行う。

そして、そのために

- 1 教育実習とは何かを理解する
- 2 教育実習の意義を理解する
- 3 学校における教育活動全般について理解する
- 4 教師の役割(仕事)を理解する
- 5 授業づくりを理解する

の5項目をねらいにおいて、一講義ごとに一つのテーマを中心に講義を展開していく。

（４）ルール

授業を実践する上で、教室内に秩序がないと授業が成立しないことは、言うまでもないことである。

加えて、教員には他の職業に比べてより高い倫理観等が求められていると考えるべきである。

このように考えると、教員を志望する学生には、このことを踏まえて大学の講義においてもある程度のことを求めたい。

私の講義を受講するエチケットとして教室内ではまず帽子、キャップ等のたぐいはかぶらずにおくこと。机上にはジュース等の飲料水のボトルは置かないこと。講義中に必要以外の時に携帯電話等の機器の使用を禁止すること。無断で講義中に教室の外に出ないこと。出るときには講義中でも私に断ること、等。

これらについては、講義を受けるにあたって至極当然のエチケットであり、マナーでもあると説明し、講義を受講する学生の了解のもとに講義をスタートさせている。

授業中に私語など自分勝手な行動を放置すれば、授業どころではなくなることを学生にも理解して欲しいと思っている。そしてこの約束事を破ったときには、教室から出て行ってもらうことを了解させ、約束を交わしている。

大学生といえども「ダメなものはダメ」と言うことをしっかりわかって欲しいし、このようなことを子どもたちに指導することは大切なことだと言うことを理解して欲しいと思っている。それを先ず私から実践して見せ、そこから学生たちにいろいろ考えて欲しいのである。

3 個人レポートの取り組み

まず、講義の一番初めに個人課題を提示する。おおよそ10分間の時間を取り、各自でi-Padやスマホなどの検索機能を持った機器を使って調べ学習をさせる。この個人課題への調べ学習を個人レポートとして簡単にまとめさせる。

大学の講義というと一般的に話を聴いているだけという受け身的なことが多いようであるが、これでは学習者の自律性は育たない。まして将来教員になろうとす者には自律的な学習姿勢を身に付けて欲しい。個人レポートの課題は次の通りである。

第1講 「オリエンテーション」

なので課題はなし。

第2講 「学校とは」

- 1 学校とはどういうところか。
- 2 「ひと・もの・こと」の視点から学校を構成する要素を全てあげなさい。
- 3 これらの構成要素から教師としてどのようなことが考えられるか。
- 4 学校とはどのような組織か。他の組織と比べて学校という組織をより明確に考えてみなさい。
わからなければ、塾と比較して共通する点、異なる点をあげ、決定的な違いを述べなさい。

第3講 「望ましい教師の資質・能力」

- 1 望ましい教師とはどのようなものか。あなたの考えを述べなさい。
- 2 望ましい教師の資質・能力にはどのようなものがあるか。できるだけ具体的に述べなさい。

第4講 「学習指導要領の性格」

- 1 学習指導要領のおもな性格にはどのようなものがあるか。
- 3 現行の学習指導要領のおもな特徴をあげ、それぞれについて説明しなさい。

第5講 「教育課程の編成」

- 1 教育課程とはどのようなことを言うのか、述べなさい。
- 2 学習指導要領総則第1章第1「教育課程編成の一般方針1・2・3」を読んで、それぞれ小見出し(タイトル)をつけるとすると、どのようなものが適当か。また、その理由を考えなさい

それぞれの講義のタイトルがそれぞれの講義のねらいである。学生が自分で調べたことが本時の講義の内容につながっており、次のグループ協議での話し合いを通してさらに深められる。

4 グループ協議の取り組み

個人で調べ学習をし、レポートに簡単にまとめたものを持ち寄って、次に4人ずつのグループで話し合いを進める。

なお、グループ編成については学生の自由にはさせないようにしている。様々なコースの学生が混在しているので、平均して各コースの学生が混じり合うように意図的に私のほうでグループ編成する。

このグループ編成については、教育効果や学習効果を上げるためには意図的にグループ編成をする場合がよいことがあることを学生に説明し、納得した上で実施している。

学生たちは、出された課題について順に自分の考えや意見を発表し合い、グループとしての考えをまとめる作業をする。この活動を通して課題についての考えを互いに深めることができる。おおよそこの活動を15分程度とっている。

各グループでの協議のまとめには、ホワイトボードを使用して、グループの考えをまとめさせる。ホワイトボードにまとめを書くことで、グループでの協議が明確になっていき、また後で他のグループとの比較もできると考えている。

最後には全体でそれぞれグループの考えを発表し合い、共有する。各グループの代表者がホワイトボードを使って説明する。ホワイトボードにポイントが書いてあるので、説明は比較的容易にでき、聴いている学生にも理解しやすい。

学期に10数回の発表する機会があるので、発表をする学生は順に担当するようにする。全体の発表後には、発表に対する質問、意見あるいは感想を求めることにしている。

望ましいのは、この時にたくさんの質問や意見が飛び交うことである。このようなキャッチボールの中で学生自身の考え方がさらに互いに深まっていく。

私が考える一番望ましい学習は、実はこの時点で学習のねらいを達成できることである。個人の学びがきっかけとなり、グループ学習、全体での発表と意見交換でほぼ提示した課題への考えは十分出尽くすはずである。

5 説明

最後に私からテーマについて整理し、まとめをスクリーンに映して補足説明をして終える。これが私の講義のパターンである。

(1) 第2講「学校とは」

学生たちの個人レポート及びグループ協議から、学校を構成する要素の「ひと・もの・こと」の視点からは様々な考えが出された。教師が教育活動を効果的に展開するためには教員一人ではなかなか難しく、当然のことながら学校ぐるみ及び学校内外のあらゆる教育資源を活用して取り組むことが大切であると思う。

学校と言う組織と塾との決定的な違いについては、大半の学生は学校が学習だけではなく人間性等色々なことを学ばせる場所であるという回答であった。まさにその通りであり、このことが学校教育の意義でもある。

公教育を担うことを考えると、学校の教育が様々な法律によって規制されていることもきちんとおさえない点である。この点について発言できた学生はほとんどいなかった。補足説明した後に、教員を志す者は教育法規をなぜ学ばなければいけないかがわかったはずとも加えた。

(2) 第3講「望ましい教師の資質・能力」

学生が考える望ましい教師像はまさに十人十色であった。前向きで一生懸命さが伝わってくるものが多かった。意欲を感じ、またある意味で感心もした。真面目な学生が多いとも感じられた。

しかし資質・能力を考えた場合に明確に区別して述べられる学生は多くない。そこで、中央教育審議会答申等を引き合いに出し、求められる教師の資質・能力について具体的に説明した。学生には、現在求められる教師の資質・能力を十分考慮に入れて自分なりの理想とする教師像を持つべきであり、学生時代に大学での学びの中で精進して欲しいと話した。

(3) 第4講「学習指導要領の性格」

性格については、国の教育のスタンダードであること、法的拘束力があること等、指導要領の意義については発言、発表からほぼ出尽くした。

現行の学習指導要領の特徴については、知識がかなり不確かで不十分であったので、資料を用意して説明を加えた。言語活動についても具体的に図で示し、なぜ言語活動が必要とされるかの理解を深めた。

(4) 第5講「教育課程の編成」

教員としてブレずに教育活動を展開するためには明確な根拠、拠り所が必要である。根拠や拠り所を明確にして実践を多様に展開することが望ましいと考える。

学生たちは、「教育課程編成の一般方針の2, 3」については比較的簡単なようであったが、1についてはかなり難しかったようである。1については、教育課程編成の原則が述べられ、編成の主体は学校にあることが述べられている。このことが学校における教育活動の根底にあるわけだから、確実に確認をしておきたいことである。

その意味でも一度は丁寧に学習指導要領の一般方針は学生に読ませたいと考え、実践している。丁寧に読み込み、内容を理解することを学生に勧めたい。

6 おわりに

「主体的・対話的で深い学び」を生かした講義の工夫として、90分の講義の中で意図的に学生が活動する場面を設定してきた。検索機能の機器を用いて個人で調べ学習をすること。4人によるグループ協議でテーマについて深めること。全体の場面でグループでの協議の内容を発表して全体で考えを共有してテーマを深めること。

加えて教育機器を積極的に活用して効果を上げること。90分の講義の中で学生が活動する時間は個人レポートに取り組むことに10分、グループ協議に15分、発表に数分おそらく7、8分程度。計算するとおおよそ30数分間は学生が活動する時間である。残りの60分が説明すなわち講義の部分である。

これが私の講義の進め方の全てであり、実にシンプルである。「ぞうきん」と「若者」は絞れば絞るほどよいと私は思っている。講義中、学生に楽をさせないことで学習が身につくこととなり、自律した学習者につながると思っている。

拙い私の実践を述べてきたが、是非様々な点から指摘していただき、さらに改善を図りたいと思っている。

日頃から「向き、不向きより前向き」に取り組む事が大事だと学生に言っている以上、今後も授業(講義)改善への努力を惜しまず前向きに取り組みたい。